

透明・公開性を確保し 道民の意見反映に努めよ

先鞭をつけた 道庁発の試み

「走り出したら止まらない」と信じられてきた、公共事業のありように一石を投じた北海道庁発の「時のアセスメント」。この新施策の導入から二年、すでに八事業について「中止・凍結」「見直し」の結論をみた。残る土幌高原道路の再評価は、公開の場で賛否双方の意見を交わすことすらできない事態になっただけで、三月中には結論が出される。「走っただけで止められる」が常識の時代になった。

道庁不正事件で地に落ちた道政の汚名挽回にも寄与した「時のアセス」は、政策室の磯田憲一室長や若手職員たち

かつて公共事業は「走り出したら止まらない」ものの代名詞だった。そんな流れに一石を投じたのが北海道が導入した「時のアセス」。省庁版の再評価システムも始動している。「走っただけで止められる」時代にはなかったが、問題点も多い。道・開発局の施策を検証しながら、改善の道を探ってみた。

連載・転換期の公共事業⑦

道庁・開発局の 事業アセスを検証する

ルライター 滝川 康治



(写真右) 道の「時のアセス」をめぐる自然保護団体による討論集会も開かれた(98年2月、札幌市内で)。
(写真左) 土幌高原道路の再評価は3月中に結論が出される

つけてもいいのではないか。

わたしがもつとも評価するのは、道職員の自己点検を促した点である。松倉タムのように当初、現業部署の職員の間には制度の主旨を十分浸透できなかった、といった問題はあったが、自ら点検する試みをシステム化した意義は大きい。「時のアセス」が流行語になって報道も盛んにされ「道民に見られている」との緊張感が職員の間を生み出したことも好影響を与えた。

情報公開にも工夫が見られた。関係

する資料の提供に努める一方で、検討チームの進行状況を道庁のホームページに掲載するなど、従来の行政手法を変えようとした。関係道民から情報公開の不十分さを指摘する声があったが、「提供しよう」と努めた意欲は評価してもいいのではなからうか。

道民の意見を反映する手法として、説明会や関係者からの意見聴取、松倉タムの意見交換会の取りくみなどが試みられた。実際に傍聴してみると、記録に残るために役所調の受け答えが目

の発案によるもの。役人から行政のトップになっただけの痴知事が提唱したのではない。
停滞したり、停滞する恐れのある道の公共事業に対して、当初の目的や役割に「時」という物差しを当て、「必要性」「妥当性」「優先性」「効果」「住民意識」「代替性」の六項目によって、点検・評価していくものだ。政治的な思惑や利害から離れたところで、評価項目に沿った冷静な政策判断を志向するシステムといえる。この二年間で、土幌高原道路や松倉タム、「道民の森」の民生活事業といった話題を呼んできた事業や、北広島市でのハイメックス構想など九事業が組上りのほった。

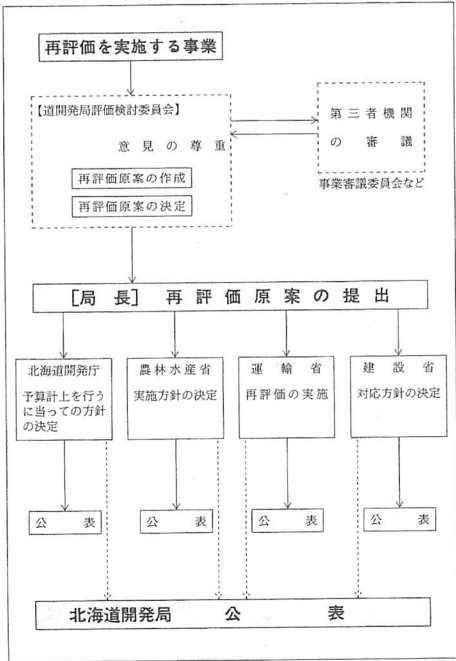
第一次「時のアセス」の評価は、最大の懸案である土幌高原道路の結論を待つべきだが、いまのところ合格点を立ったものの、道民の声を聴こうとする姿勢は好感をもてた。

再評価システムを積極的に活用していけば、行政職員が従来型の公共事業からの脱却をめざすときの大きな力になる——と、わたしは見ている。二年間の試行錯誤によって、具体的なノウハウが蓄積され、自己点検の気風が定着してきたことが、「時のアセス」の収穫といえる。

政策評価の柱は 説明責任と公開

道は本年度、「時のアセス」の延長に、道の事業すべてについて担当者が自己評価して優先度を決める「政策アセスメント」を導入した。未連載①を参照。「数値化することが目的ではなく、合理的な事業の選択や見直しをすること」(政策室の磯田室長)が最終目的のシステムで、「説明責任」と「情報の公開」を柱にすえている。政策評価の対象には、九十三事業三千四百一十一地区にもおよぶ「開発公共事業費」も含まれる。同事業費の評価の視点は、

図 道開発局が実施中の「事業再評価」の流れ



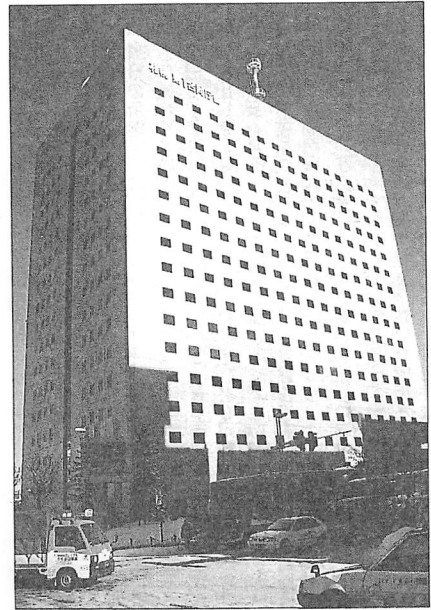
見直しの必要が生じた事業
「停滞する可能性があるもの」も含めて幅広く対象事業を選んでいく「時のアセス」に比べると、ごく機械的に対象を決めている。

再評価の視点には、「事業継続の妥当性」「進捗状況」「社会経済情勢などの変化」「コスト縮減や代替案の可能性」の四つを挙げる。道の政策評価の視点に盛り込まれた、「目的と手段は適合しているか?」「環境上の課題はないか?」といった重要なチェック項目は入っていない。別項に再評価の流れを載せた。残念ながら、学識経験者らで構成す

る道開発局事業審議委員会(委員五人。委員長は内田和男・北大経済学部長)の意見を聴くことにとどまり、意見の公募などをつうじて一般市民が口を開けるシステムにはなっていない。

おまけに、この委員会は非公開である。開発局はその理由について、「先生方の意向であり、今後とも非公開でいく。報道機関に当日の資料を配付し、終了後に委員長のレクチャーもやっている」(開発調整課)と、にべもない説明。

最近、国や道の各種委員会は審議の公開が進んでいるだけに、ずいぶん遅れた対応に映る。一般市民にとっては、



3省の公共事業を担う道開発局が入っている合同庁舎

要なものを見直して重点化することが、徹底していくようになるでしょう」とみるのは、評価結果を集約する政策室の伊東和紀参事である。

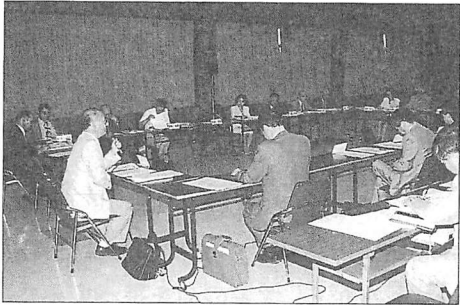
「時のアセス」同様、インターネットなどで結果を公表しているが、件数が多いので膨大な量である。試しに道庁のホームページを覗いてみると、すでに二千五百六十件ほどのアクセス数があった(1月26日現在。アドレスは、<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>)。評価結果について「いまのところ、道民からの際立った反響はない」(政策室)らしいが、新施策を積極的に導入した手法は評価されている。

が、「政策評価イコール公共事業の大きな変革」といえば、それは違う。不要不急の事業と知りつつ、道の職員たちが予算消化に走り回る、という構図にいまも変わりはない。そのなかで事業選択のメリハリをつける道具、という限界があるのも事実である。

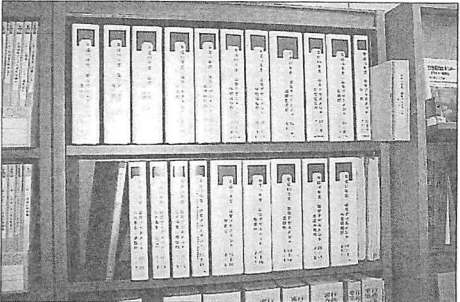
担当者の意欲的な姿勢とは裏腹に、全国に先駆けた「時のアセス」の試みではないかと、わたしは感じている。むしろ「時のアセス」ですぐれた

理由を「規模が大きいため」「市町村事業との調整の結果、工期延長」などとごく簡単に記すものがほとんど。社会経済情勢の変化では、洪水の発生年を示したり、「自然保護団体との意見交換会を実施」などの記述がある程度だ。そして、ほとんどが「現計画の継続」と結論づけている。

こうした資料を委員に示しても、十分な審議は不可能だ。まして、一般市民の目には、ほとんど理解不能の文書に見えるだろう。ただ進捗率が小さいから問題が多いという単純なものにはならない。一つひとつ事業の中身を見たらうで、特性にあった評価、意見が



松倉ダムのアセスでは市民と行政の「意見交換会」も取り入れた(98年8月、函館市内で)



「政策アセス」の評価結果は膨大な量に。道・支庁で縦覧し、インターネットでも公開している

①進捗状況「事業推進に課題を抱えていないか。課題解決のための手法などは妥当か。」
②効果「社会状況や住民要望の変化などにより、期待する効果の有効性に変化はないか」
③事業目的と手段「適合しているかどうか。代替案の可能性はないか。」
④環境上の課題

の四項目。後述する国の再評価との関連で、すでに二百二十八地区を先行して自己採点した(残りは三月末までに結論を出す予定)。

第一次分の評価結果は、「継続」が圧倒的に多く百九十八地区で、「見直し」は三地区。「休止・廃止」はゼロだった。「時のアセス」の対象事業に比べると、採点の甘さが目立つ数字といえる。「政策アセス」導入の正式発表は昨年七月で、一次分の結果報告は三カ月後という目まぐるしさ。「短期評価」に職員の間には戸惑いや不協和音もあった、という。

「これからの時代は、こうした手法でしか政策形成を図れない」と(庁内で)認識されてきた。再評価の結果、事業が採択されなかったり、予算の振り替えなどが生じる可能性がある。不

「時のアセス」は東京にも波及し、建設省など六省庁は本年度から公共事業の再評価システムを導入した。道庁の試みが中央をリードしたわけだ。

こちらの再評価作業を担うのは道開発局。次の三つに該当するものから対象事業が選ばれる。

①事業採択後、五年間を経過した時点で未着工の事業
②採択後、一定期間(五〜十年間)を経過した時点で継続中の事業
③社会経済情勢の急激な変化などで

実践例をつくり、その具体的なノウハウを全国に発信する方向を優先させたほうが良かったのではないかと。さらに、公共事業に関心をもつ道民の意見が反映する、より透明性の高いシステムに改善する工夫も必要だろう。これまでの意見聴取の手法に加えて、関心をもつ人たちの討論会や代替案の協議、現地調査などを、積極的に取り入れてみてはどうだろうか。

分かりにくい 開発局の再評価

必要ではないか」といった委員からの指摘が、議事録に載っている。まっとうな意見である。

三週間ほどのに開かれた第二回委員会には、やや細かい資料が示された。が、これとても急ごしらえで数字の羅列が多く、現場の実態をつぶさに理解できるものは少ない。委員会は結局、余別漁港の修築に対して見直しを求めたほか、天塩川上流の河川改修をめぐって首威子府村の狭窄部対策に注文を付けた程度で審議を終えた。

開発局の再評価作業は緒にいたばかりで、「公共事業をしっかりと点検してほしい」という道民の期待に応えるには、まだまだ工夫と時間が必要である。開発局の人たちには、よりいっそう切磋琢磨してほしいものだ。

「時のアセス」の 実践にまですべ

道、国それぞれの取りくみを概観してみたが、省庁版アセスのほうは公開性や市民の意見反映の面などで、まだ「時のアセス」のレベルには及ば

ない。この二年間、立ち止まって自己点検する施策を根づかせた道庁に一日の長がある。

しかし、より質の高い事業評価が求められるのは、建設・運輸・農水の三省にまたがる公共事業を担い、予算規模も大きい開発局のほうだろう。

「社会経済情勢の変化などで見直しの必要が生じた事業」という要件を柔軟に捉え、道民や関係機関の間で論議を呼んでいる事業を積極的に点検してみる。説明会や討論会、意見交換会といった場を設けて、関心をもつ道民の意見聴取に努める。分かりやすい資料づくりを心がけ、報道機関やホームページなどを活用し情報公開を進める——こうした試みを積み重ねていけば、すぐれた実践例が生まれるのではないだろうか。

従来型の公共事業にこだわる、お固い土木官庁——といったイメージが強い開発局にとって、透明性と公開性が確保され、道民の意見が反映する評価システムへと転換できれば、組織再生への好機にもなるだろう。まずは「時のアセス」の実践例に学びながら、よりよい事業評価の道を模索することから始めてみるべきだ。